九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中世西欧の夢幻視物語における物語構成上の特徴について

壬生, 正博
福岡歯科大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/20626

出版情報：地域健康文化学論輯. 3, pp.17-29, 2010-09-30. Japan Institute for Community, Health, and Culture
バージョン：
権利関係：

中世西欧の夢幻視物語における物語構成上の特徴について

壬生　正博

はじめに

H.R.Patch は、その大著 *The Other World*[1]の中で、異界描写の個々の要素、例えば、橋、川、山、谷、泉、草木、壁等に焦点をあてた論及を行ったが、小論では視点を変えて、(1)異界への移動、(2)異界の道案内、(3)陰惨な世界、(4)光溢れる世界、そして(5)異界から現実世界への帰還、の５項目に分けて夢幻視物語の展開・構成上の特徴について論じる。[2]小論では、中世西欧で創作された 6 世紀から 13 世紀頃までの夢幻視物語の数作品を研究題材に取り上げる。本論説の目的は、夢幻視物語の諸作品が、数世紀もの間、同等の観念を基に創作された点を探求することにある。この観点から、諸作品間の比較検討は極力避けて、物語の骨子・枠組みを把握することに主眼を置く。

Ⅰ．夢幻視物語の時代的特徴

夢幻視物語は、数世紀に渡って創作されたので、それぞれの時代思潮を反映している。この点について Alison Morgan の時代別特徴の解説は簡潔で有益であるので、まず、その解説に拠って特徴を呈示しつつ、小論で取り上げる物語を指摘しておく。[3]

異界を描く夢幻視物語が文学のジャンル（genre）として確立するのは 6 世紀後期である。代表的作品は Gregory the Great の *Dialogues*、ほぼ同時期の Gregory of Tours の *History of the Franks* がある。ここでは、前者から修道士 Peter、貴人 Stephen、そして、ある兵士（a certain soldier）の幻視を取り上げ、後者からは St. Salvius の物語を取り上げる。[4] 8 世紀に至ると尊者 Bede が *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* を著す。この作品から､徳の高い聖人 Furseus と敬虔な善人 Drythelm のふたりの幻視を取り上げる。6 世紀後期から 8 世紀前半頃の作品に登場する夢幻視者（virionary）は、兵士（soldier）、戸主（householder）、そして平信徒（layman）等が主で、著述の目的は"instructing the faithful and encouraging them to choose the way of salvation"[5]であり､教訓的（didactic）な内容が語られた。上記の諸作品が与えた影響は極めて大きく、後の夢幻視物語の規範となった。

8 世紀中庸から 10 世紀頃まで続くカロリング朝（Carolingian era）時代の夢幻視物語は、政治的（political）、風刺的（satirical）な傾向が強まり、夢幻視者として登場する人物はほとんどが修道士（monks）で、文書の編集をしたのは司教（bishops）や大司教（archbishops）等の高位聖職者たちであった。この頃の代表作には修道士 Wetti の幻視を描いた *Wetti's Vision* があるが、この物語は教会側の政治的武器として用いられた。この他にフランク族の王 CharlesIII の幻視を描いた *Charles the Fat's Vision* もやはり政治的な内容を持つ。この時期の夢幻視物語は、教会色が色濃く反映された作品である。その後の 11 世紀頃は、異界文学における際だった特徴を持つ作品は見られない。

12 世紀に夢幻視物語は最盛期を迎え、この頃の作品は、教訓的で政治的、更に文学的な

性質を発展させた。夢幻視者は聖職者（clerics）に限らず、小作人（peasants）、子供（children）、その他に騎士（knights）等の一般大衆にも焦点があてられた。編者たちは、高位聖職者ではなく、修道士（monks）や大修道院長（abbots）たちであった。この時代の作品は、それまでのものと比べ、長編で複雑な構成を持っている。恐らく、当時の社会的変化や知的変化を繁栄しているのであろう。代表作には、*St. Patrick's Purgatory*、*The Vision of Tundale*、*The Revelation of the Monk of Eynsham* 等がある。13 世紀初頭に創作された *The Vision of Thurkel* は、12 世紀の作品の特徴を持っているので、上記の作品群として扱ってよい。この四作品を取り上げる。

以上が、6 世紀から 13 世紀頃に至るまでの夢幻視物語の時代的特徴の概要である。小論では、諸作品の背後にある政治的、風刺的な側面には立ち入らず、物語の記述を中心に据える。なお、上記の諸作品はラテン語で著されたが、ここでは、Gardiner の現代英語訳を主に使用する。[6)]

II. 夢幻視物語の構成

ここでは作品の創作時代に沿い、物語の展開を重視しつつ、はじめに述べた(1)から(5)の各項目について解説する。

(1) 異界への移動

夢幻視物語では、異界探訪の媒体となるのは、主として"dream"「夢」あるいは"vision"「幻視」である。これらによって、夢幻視者の魂（soul もしくは spirit）は肉体（body）を離れて異界へ行く。[7)]

まず、*Dialogs*（Book IV, Chap.36）では三つの夢が語られる。修道士 Peter と貴人 Stephen は病気が原因で仮死状態になり幻視を見た後、再び息を吹き返す。そして、ある兵士の場合は、やはり仮死状態になって異界の様子を垣間見る。*History of the Franks* では、修道士 St. Salvius は高熱で倒れて仮死状態となり、その間、ふたりの天使に異界へ連れられる。尊者 Bede が語る聖人 Furseus と敬虔な Drythelm のふたりもやはり仮死状態になり、魂が肉体から離れ異界で幻視体験をする。

Wetti's Vision では、修道士 Wetti は、健康増進のため滋養物を摂取すると体調が悪化し、横になっている間に幻視を見る。本作品では Wetti が見た二つの幻視が記されているが、どちらも睡眠と関係している。*Charles the Fat's Vision* では、主人公の王 Charles は、"Lord's day"[8)]の夜、睡眠中に幻視体験をする。

St. Patrick's Purgatory では、アイルランドの司教 St. Patrick はアイルランドの人々の不敬虔さを何とか正そうと、"fasting"「断食」[9)]をしつつ、神に懇願する。すると"Son of God"[10)]が Patrick の前に顕れて煉獄を見せる。ここでは眠りとの関係はないが、St. Patrick の場合は、断食が幻視をみるきっかけとなっている。この後、騎士 Owein が浄罪のために Patrick の煉獄に入るが、この騎士は肉体のまま異界を訪れている点は、この作品の重要な特徴である。[11)]つまり、本作品では、煉獄の現実性を強調していると思われる。*The Vision of Tundale* では、神を顧みない罪深き Tundale が主人公で、彼は借金の取り立てに行き、

債務者の家で食事をしたときに発作に襲われ仮死状態になり、その間、異界を旅する。*The Revelation of the Monk of Eynsham* では、主人公である修道士は病気がちで、安息日の前日に仮死状態になり二日間の幻視体験をする。*The Vision of Thurkel* では、夢幻視者 Thurkel が眠りに就くと、彼の魂は異界を訪れる。

以上の記述から、物語が異界へ移行するきっかけとなるのは、主人公たちが仮死状態に陥る場合が多いようである。そして、仮死状態の原因は、疾患や体調不良等が目立っている。

(2) 異界の道案内

神の任命を受けた天使、あるいは他界した聖人等の超自然的存在が、[12]異界にやってきた主人公の案内役（guide）となり、種々の出来事や光景の意味を主人公に説明（啓示）する。そして、主人公は他界した聖人や偉人、肉親や友人、あるいは知人と邂逅し、彼らが死後も生きている事実を知る。Gardiner は異界の案内役について以下のように述べている。

> The guide is responsible for enlightening the soul about the meaning of the places he sees and, indeed, the meaning of the journey itself. The guide also serves as a protector. He either prevents the soul from being hurt by the demons encountered in hell, or he heals the soul after he is wounded. [13]

以下の諸作品では、天使が主に案内役を務め、時に聖人の場合もある。しかし、主人公を悪魔や様々な危機から救い、主人公の傷を癒すのは天使であり、聖人たちは、主人公を教え諭す立場のようである。

Dialogues に記された三つの幻視には、異界の案内役は記されていない。しかし、Peter が地獄の燃えさかる炎の中に投げ込まれようとすると天使が顕れて救い出す。そして、天使は元の世界に戻って敬虔な人生を送るよう諭す。*History of the Franks* の St. Salvius は、仮死状態の間、ふたりの天使に導かれて天へ昇った。Bede が記す Furseus は、複数の天使たちに異界での危機から救われ守護される。一方、Drythelm は、光り輝く人物－天使か聖人か明らかではない－に導かれ、異界で見た谷の意味が明かされる。Wetti は第二の幻視の中で天使に異界へ導かれる。この天使は、Wetti を守護するために神から遣わされた使者であり、かつては勇者 Samson の守護天使でもあった。*Charles the Fat's Vision* では、輝かしい人物－Drythelm の場合と同じく天使か聖人か明らかではない－が Charles を導き、種々の危険から守る。

騎士 Owein には異界の案内者はいないが、彼が煉獄の中に入ると十五人の賢者たちがやってきて、堅固な信仰心を持てば悪魔の誘惑に打ち勝つと教示する。Tundale は、天使に導かれてまず暗黒の世界を訪れる。彼は犯した罪の故に悪魔から拷問を受けるが、その都度、天使が救いの手を差し伸べる。*The Revelation of the Monk of Eynsham* では、主人公の修道士は、St. Nicholas によって異界を案内される。[14] Thurkel は、St. Julian と大天使 Michael によって異界の中を導かれ、そして、Wiiliam は、St. John と St. Ive のふたりの聖人に案内される。

以上のように、本稿で取り上げた作品では、夢幻視者を異界で導く、あるいは救済するのは、天使に任務が負わされているようである。天使は神に使える存在であり、詰まるところ、夢幻視者の異界での体験の背後には、神の意志が存在していることがわかる。

(3) 陰惨な世界

夢幻視者たちは、多くの場合、初めに陰惨な世界へ行く。そこは暗黒の世界でもある。この場所で、夢幻視者たちは身の毛のよだつ悪魔たちを目撃し、罪人たちの悲惨な様子に恐怖し、ある時は夢幻視者も悪魔たちに捕まり極度の苦悩を体験する。暗黒の世界では煉獄と地獄が描かれるが、両者は明確には区別されていない。しかし、煉獄では微罪を犯した者たちが浄罪のために一時的に滞在する場所で、最後の審判（Last Judgment）の日に救済される望みがある。一方、魔王（Lucifer）がいる最下層は地獄の底であり、ここに堕ちた者たちには救済の望みが一切絶たれる。暗黒世界の要素としては、審判の橋、[15]暗い谷、悪臭を放つ川、罪人を焼く業火、罪人が浸けられる大釜、鉄が煮えたぎる炉、爬虫類や獣、グロテスクな形相の悪魔たち等を挙げることができる。

Dialogues の描写では、Peter は、地獄の責め苦とたくさんの陰惨な場所を見る。現世で権力を誇った者たちも地獄の炎に焼かれて苦しんでいた。Peter もこの炎の中に投げ入れられようとするが、天使に救われる。Stephen の魂は"the dungeon of hell"「地獄の地下牢」[16]へ運ばれ、様々な出来事を目撃した。彼は"judge"「裁判官」[17]の前に連れ出されそうになるが、裁かれるのは彼ではなく別の人物だったので追い返される。ある兵士は、悪臭を放つ川の上に掛かる橋を見る。それは悪人がこの橋を渡ろうとすると落下し、善人は難なく渡ることができる審判の橋であった。[18]かつてローマ法王家の執事だった人物が、無慈悲に人を罰した科で鉄に縛られてこの橋に連れてこられた。そして、ある聖職者も連れてこられたが、彼は誠実に人生を過ごした故に、無事に橋を渡った。他界した Stephen の魂も橋を渡ろうとしたが、足を滑らせて、身体半分が橋から落ちそうになった。すると、川から恐ろしい生き物が出てきて、彼を引きづり込もうとするが、白い衣装の人々が現れて、彼を引き上げようとした。それは Stephen が慈悲と無慈悲の両面を持っていたからである。しかし、この時、兵士の魂は肉体に戻ったので、Stephen のその後の運命は記されていない。*History of the Franks* では、St. Salvius は陰惨な世界については語っていない。

Furseus は、闇に包まれた谷に世界を焼き尽くす四つの火が燃えているのを見た。第一の火は欺瞞（falsehood）、第二の火は貪欲（covetouseness）、第三の火は不和（discord）、そして第四の火は不正（iniquity）で、これらはひとつの巨大な火になった。悪魔がこの火の中にいる邪悪な魂を Furseus に向かって投げつけると、彼は肩と顎に火傷を負った。それは、この罪深い魂が生きていた頃に、Furseus が彼から衣類を受け取った故に、罪人の懲罰の一部を被せられたのである。天使は悪魔に、Furseus は金銭欲から受け取ったのではなく、相手の魂を救うためにそうしたのだと言った。しかし、彼が受けた傷は、不思議なことに、肉体に戻った後も残っていた。Drythelm は、天使に暗黒の世界に導かれ、まず谷に辿りつく。谷の左側は炎に包まれており、右側は、霰と雪に包まれていた。穢れた魂たちは、炎から雪へ、あるいは雪から炎へと投げ込まれ苦しみ喘いでいた。ここは地獄ではなく煉獄である。何故なら、この魂たちは死に臨んで悔悛したので、審判の日に天

の王国に受け入れられるからである。しかし、もし現世に生きる者たちが彼らのために"prayers, alms and fasting of the living, and more expecially by Mases"[19]を行うならば、彼らは審判を待たずに救済される。天使と Drythelm が更に先に進むと、"globes of black flames"「真っ黒な火の球」[20]があった。その球は、奈落の底の穴から出てきては、また下に落ちていった。この穴は"mouth of hell"[21]で、火は人間の魂たちのかたまりだった。その時、Drythelm は奈落の底からやってきた悪魔たちに襲撃される。悪魔たちは"glaring eyes"[22]をしており、口からは"stinking fire"[23]を吐いていた。しかし、彼は案内役の天使に救出される。

Wetti's Vision には、大理石で造られたような美しく高い山の周囲を流れる「火の川」が描かれている。川の中では、地獄に堕ちた無数の人々が苦しんでいた。山には城のような建物があり、その中から煙がでていた。そこは修道士たちの浄罪の場所で、彼らは最後の審判の日を待っていた。しかし、この作品の記述は暗黒の世界とは言い難い。

Charles the Fat's Vision では、案内役の人物が渡した"a ball of thread emitting a beam of the purest light"[24]によって悪魔たちの攻撃から守護される点は、他の諸作品とは異なっている。更に Charles は、硫黄、鉛、鑞や樹脂で煮えたぎるたくさんの穴がある深い谷で、彼の父親や叔父たちが地獄の苦しみを受けている惨状を目撃する。上記の *Wetti's Vision* と同様に、本作品は、具体的な地下界の描写には意識が及んでいない。

騎士 Owein は、悪魔たちに何度も苦しめられる。しかし、彼は堅固な信念を持って Jesus Christ と St. Mary の名を叫ぶと苦悩から救い出される。Owein は悪魔たちに様々な苦しみの野原に連れて行かれ、悲惨な光景を見る。ある野原では、人々は熱い鉄の釘で身体や手足を地面に打ち付けられていた。その他、竜や蛇に苦しめられる野原、足を鉄の鎖で繋がれて火の上に吊されたり、目や鼻を熱い鉄の鉤で刺され火の上に吊される野原、車輪に繋がれて燃え盛る火の上で回される野原があった。たくさんの大釜が置かれた家もあった。釜の中では硫黄や金属が溶け、人々は犯した罪に応じて、目まで、口まで、鼻までというように浸けられていた。有毒で悪臭を放つ炎がでている井戸の描写もある。ある悪魔たちは、この井戸は"the entrance to hell"「地獄への入り口」[25]だと言ったが、他の悪魔たちはそれを否定して、Owein を悪臭を放つ火の川に引きずっていった。そこに地獄の本当の入り口があり、この川にはパラダイスへ通じる「橋」が掛かっていた。悪魔たちは、この橋は滑りやすくて幅が狭く、とても高いので下を見れば目が眩むだろうと言って Owein を脅すが、彼はこの橋を無事に渡り終えることができた。先述の如く、Owein には案内役はいないが、悪魔たちに引きずられてパラダイスに通じる橋がある所までやってきた点を考えると、ある意味では、悪魔たちが地下世界を案内する一端を担っていると言えよう。

Tundale は、天使に導かれて初めに暗い谷へ行き、犯罪者たちが拷問に苦しむ姿を見る。その谷で苦しんでいたのは「殺人者」たちだった。次の大きな山では、「スパイや反逆者たち」が苦悩していた。そして、Tundale と天使は腐ったような悪臭を放つ深い谷に行く。そこは暗黒が支配する場所で、硫黄が燃える音と呻き声しか聞こえなかった。この谷に橋が掛かっており、高慢な者はそこから落ちて永遠に破滅する。Tundale が先に進むと、巨大な獣がいた。獣は口から火を吐き、貪欲な者たちの魂を苦しめている。天使がこの獣の前に行くと、突然、姿を消したので Tundale は置き去りにされた。すると、悪魔たちが Tundale に寄ってきて、彼を獣の腹の中に引きずり込んだ。耐え難い苦痛が彼を襲ったが、

彼はいつの間にか救出されていた。次に大嵐の吹き荒れる湖があった。その中にはたくさんの恐ろしい獣がいて、湖の上には橋が掛かっていた。前の橋よりも長くて幅が狭く、表面には鋭い鉄釘がついていた。強盗を犯した罪人は、この橋を渡らなければならない。Tundale は、隣人の雌牛を盗んだ罰として、雌牛を牽いてこの橋を渡るよう天使に命じられる。彼が橋の中央まで進むと、反対側から荷物を持った別の人物がやってきて、お互いに立ち往生した。しかし彼らはいつの間にか向こう岸にたどり着いていた。先ほど述べた *Dialogues* や *St. Patrick's Purgatory* と同様に、「橋」が重要なモチーフとなっている。次に Tundale は、炎が吹き出す巨大な家にやってくる。ここは「貪欲」と「姦淫」の罰の場所で、家主 Phristinus は、飢えを満たすことができず、他の魂たちも虫たちに股間を蝕まれ苦しんでいた。Tundale はここで悪魔たちに切り刻まれ、耐え難い苦痛を体験する。そして、先にはまた別の獣がいて、魂たちを飲み込んで胃の中で溶かしては、また吐き出していた。次の場所では、「好色な修道士たち」が獣に苦しめられていた。そこには、Vulcan の炉があり、Tundale は悪魔たちに捕まって炉の中に放り込まれるが、天使に救済される。ここまでの場所は、魂たちが神の審判を待っていることから判断して、煉獄と考えられる。一方、王 Lucifer がいる奈落の底に堕ちた魂たちは、既に審判を受けており、永遠の苦しみに喘いでいた。

The Revelation of the Monk of Eynsham では、修道士が初めに辿り着いたのは、恐ろしい沼地のような場所だった。そこでは様々な階級や様々な職業の人々が、それぞれの犯した罪に応じて苦しめられていた。次に雲にとどくほど高い山が見え、山の一方は火を噴き、もう一方は雪や霰が吹き荒れてひどく寒かった。山の向こう側の暗い谷の底では、泉から悪臭が放出していた。罪人の魂たちは、初めに臭い泉に浸けられ、そして山の一方の火に飲み込まれたのち、もう一方の極寒の場所に投げ込まれる。これらの場所は煉獄であった。.苦しみ喘ぐ者たちの中に、修道士が知っている金細工師がいた。修道士は次に地球の内部にある巨大な野に行く。この野の表面は真っ黒な火で燃え、悪臭を放ち、鼻から火を噴くたくさんの大蛇が魂たちを苦しめていた。そして悪魔たちは燃える熊手で魂たちを粉々に引き裂くと、火の中に放り投げた。魂たちの中に修道士が知っている聖職者が苦しんでいた。

Thurkel は St. Julian に連れられてまず大きな教会に行く。教会の北側に"pit of hell"[26]があり、臭い煙が立ちのぼっていた。この教会に他界したばかりの魂が集められ、行き先を割り当てられる。"white spirits"[27]は楽園がある"Mount of Joy"[28]に向かい、"spirits stained with black and white spots"[29]は煉獄の火へと連れて行かれる。魂たちの善悪の量は、"scale"[30]で測定される。秤の両脇には悪魔と使徒が待機していて、秤が使徒の側に傾くと、魂は煉獄の火に連れて行かれる。魂たちは罪に応じて火で焼かれると、その後、塩辛くてとても冷たい湖の中にある者は頭まで、ある者は首まで、ある者は胸まで浸けられ悶絶する。もし秤が悪魔の側に傾けば、魂は直ちに永遠に苦悩が続く燃えさかる炉の中に放り込まれるのであった。「歓喜の山」へ行くには、この塩辛くて冷たい湖に掛かる"a large bridge planted all ove with thorns and stakes"[31]を渡らねばならなかった。先ほど述べた教会の北側の山頂に大きくて暗い家があり、ここも苦しみの場所だった。家の中にはたくさんの熱い鉄の椅子が置かれ、真っ赤に熱せられた釘がたくさん突き出ていた。この椅子に身分の区別なく男女が座らされていた。そして、悪魔たちは、この者たちを連れてきて

は、いたぶって楽しんでいた。更に、"lower hell"[32]の入り口近くに、四つの中庭があった。初めの中庭には、炉と大釜があり、どろどろに溶けた金属の中で魂たちが煮られていた。第二の中庭には雪と氷がいっぱいの大釜があり、第三の中庭の煮えたぎる硫黄の熱湯の大釜には、「淫欲に溺れた者たち」が浸けられていた。そして、第四の中庭の大釜には、煮えたぎる苦い塩水があふれ、その中では「殺人者」、「盗人」、「魔術師」等が苦しんでいた。

William は、煉獄に堕ちた無数の魂たちが、悪魔によって数々の拷問を受けている光景を見る。彼は魂たちが業火に焼かれている様子に恐怖するが、神に祈りを捧げ、額に十字架を描き、堅固な信仰心をもつことで種々の難を逃れる。この作品の地下界は複数の階層から成っている。

以上のように、夢幻視者は、自らの体験を通して肉体的・物理的な苦しみを知る。あるいは、魂たちが苦しんでいる様子に恐怖することで、精神的な苦痛を経験している。夢幻視者を襲うのは悪魔たちが多く、その他、怪物、獣、爬虫類等の例もある。しかし、地獄へ通じる入り口や悪魔の魔王の姿を見る記述はあるが、魔王が地獄から出てきて夢幻視者を襲う描写は上記の諸作品には見られない。陰惨な場所へ行く罪状は作品によって様々であるが、罪人たちが大釜や湖に目まで、口まで、鼻までというように犯した罪に応じて浸けられるのは"immersion motif"[33]である。審判の橋も重要なモチーフのひとつである。

(4) 光溢れる世界

陰惨な暗黒の世界を抜けると、一転して、目映いばかりの光が差す場所が描写される。そこは、喜びのパラダイスで、天界の種々の秘儀が夢幻視者に啓示される。[34] 概して、パラダイスは、複数の層から成るヒエラルキー（hierarchy）の特徴がある。[35]前項の陰惨な世界もこれと同様の特徴を持っている。即ち、夢幻視者が下方、あるいは先に進むにつれて、罪人たちに対する拷問の激しさが増し、夢幻視者は最下層－奈落の底－に辿り着くと、悪臭を放つ地獄の穴、あるいは魔王ルシファーの様子を垣間見る。その後、幻視者は地上のパラダイスにやってくるが、そこは神の国の最下層に位置する。そして、夢幻視者はパラダイス内を移動するにつれて魂たちの輝きが増す事実を知り、更に、全能の神の姿を仰ぎ見て夢幻視者の精神的な充足感は最高潮（climax）に達する。

パラダイスを構成する要素として、光り輝く野原、良い香り、緑なす樹木、色とりどりの花々、陽気な音楽や厳かな賛美歌、鳥たちの陽気な囀り、宝石が施された豪華な門、荘厳な建造物、神の玉座等を挙げることができる。魂や天使たちは、主に白い衣を着ており、至福に満たされている。天界のイメージは"ideal urban and natural elements"[36]が融合・調和したまさに理想郷である。

Dialogues では、ある兵士は、悪臭を放つ川の向こう側に白い衣服を着た人々を見る。そこは香りがよく、光り輝いていた。とても大きく豪華な館があり、それは黄金の煉瓦で造られていた。しかし、誰の家かわからなかった。*History of the Franks* では、St. Salvius が天使に導かれた天の世界は、やはり光に充ち良い香りがしていた。大勢の男女がそこにいて、Salvius は、殉教者や聴罪司祭たちから丁重な挨拶を受ける。そして、心地良い香りが彼を包み、癒すのであった。Bede が記す Furseus は、天使たちの聖歌隊が厳かな賛美歌をうたうのを聴く。そして、再び彼が幻視を体験したとき、祝福された者たちの歓喜に触れた。そして、Furseus の国にかつて住んでいた聖人たちや神の天の万軍たちの姿も

見た。Drythelm の場合は、光の人物に導かれて暗黒の世界から光の世界へ入って行く。そこには巨大な壁があり、入口はなかったが、ふたりはいつの間にか壁の頂上に立っていた。Drythelm が壁の向こう側を見渡すと、"a vast and delightful field"[37]が広がり、野原一面に花々が咲き、芳しい香りがしていた。そこには白い衣服を着た無数の人々の姿があった。この場所は太陽よりも明るかったが、"kingdom of heaven"[38]ではなかった。Drythelm と天使が更に先に行くと、前の場所よりも光が溢れ、もっと香りの良い場所にやってきた。そこにいたのは、生前に善行を積んだ魂たちで、審判の日の後に天の王国に入れるのを待っていた。

Wetti's Vision では、Wetti と天使は、罪人が罰せられる場所を通った後に、とても美しい場所にやってくる。そこには筆舌に尽くせないほど立派で大きな建物があった。その中にいる王や君主たちは栄光と威厳に輝き、善行をなした故に神から与えられた王冠を被っていた。彼らは Wetti を見ると神の玉座に行って、彼に慈悲を与えてくれるように懇願する。更に先に進むと、祝福され栄光に輝いている殉教者たちがいた。彼らは神の玉座に行って Wetti のために恩寵　を願った。聖女たちのいる場所もあった。そして、彼女たちも神の玉座に行って、Wetti に永遠の命が与えられるように祈りを捧げた。*Charles the Fat's Vision* では、Charles が"most resplendent valley of paradise"[39]へ行くと、叔父 Lothaire に出会った。叔父は自分の娘の息子 Louis が Charles の後に王権を継承すると予言する。

St. Patrick's Purgatory の騎士 Owein は、地下界からパラダイスへと続く橋を渡り、対岸のパラダイスの門に辿り着く。門は宝石で飾られ、中から良い香りがもれていた。中に入ると、ふたりの司教たちが Owein を歓待し案内する。ここは地上のパラダイスであった。Owein が天空を仰ぐと、彼方に天上のパラダイスが見えた。すると、日々の食事である"flame"[40]が天上から地上に降りてきて、Owein と総ての人々の体内を充たしたのである。

The Vision of Tundale では、 Tundale は天使に連れられて、地下の最下層を出た後、光溢れる場所へ着くと壁が見えてきた。壁の門をくぐると、そこには歓喜の野や生命の泉があり、"not-very-good"、[41]即ち、善良とは言い難い魂たちがいた。更に進むと、ふたりの王 Conchober と Donachus がいた。彼らは生前に敵対していたが、他界する前に改悛した故にこの場所にいるのである。次に美しく飾られた家が見えてきた。その中の玉座にアイルランドの王であった Cormach がいて、多くの人々から崇拝されていた。更に進むと銀の壁があった。壁には入口がなかったが、天使と Tundale は気づく間もなく中に入っていた。そこでは聖人たちが神への賛美歌をうたっていた。ここは正しい夫婦関係にあった者たちに与えられる至福の場所である。Tundale はこの場所にいつまでも留まりたかったが、天使は更に上に昇ることを促す。[42]先に進むと、別の黄金の壁があり、中にはたくさんの玉座が並び、殉教した長老たちがいた。その周りにはたくさんの天幕があり、修道士や徳の高い大勢の人々が住んでいた。天空は光り輝き、黄金の鎖、酒杯、シンバル、ベルなどが垂れていて、天使たちが黄金の翼をはためかせて、その間を軽快に舞っていた。Tundale が案内役の天使に言われて後ろを振り向くと、聖なる教会の姿をした大樹があり、その下に、黄金の冠を被った高位の人々の住まいである金と象牙の礼拝堂があった。更に先に行くと、また、高い壁があり、Tundale は壁をよじ登って頂上から中を見渡すと、天使たちが九つの序列で並ぶ荘厳な光景が広がった。

The Revelation of the Monk of Eynsham では、修道士と St.Nicholas は、罪人たちが罰せられている場所を進むと、たくさんの花が咲き、とても香りのよい野原へ辿り着く。そこには煉獄で罪が浄化された人々がいた。彼らは白い衣服を着ていたが、十分な輝きはまだなかった。ここには修道士が知っている女子大修道院長や小修道院長もいて、彼らに神の栄光が注がれていた。更に内部に進んでいくと、光も香りも前の場所よりも強くなった。ここは"Upper Jerusalem"[43]で、煉獄を短期間で通過した人々がいる場所である。十字架につけられた Jesus の姿もあった。更に修道士が St.Nicholas の後について内部に進んでいくと、祝福された人々に出会った。ここも光り輝き、香りもよく、神を賛美する調和した旋律が聞こえていた。次に着いた所にはクリスタルの巨大な壁があった。入り口には十字架がついていて、これが上にあがったときにだけ人々は中に入ることができた。修道士が中に入ると、内部は言葉では表現できないほど美しく輝いていた。修道士が壁の内側を見ると、天まで届く梯子が掛かっているのに気が付いた。大勢の人々がその梯子を昇っていたが、昇るにつれて彼らの足取りはますます軽やかになった。梯子の上空に栄光の玉座が見えたが、更にその上方には、"heaven of heavens"[44]が存在していた。

The Vision of Thurkel の Thurkel は、暗黒の世界で魂たちの様々な苦悩を見た後、「歓喜の山」に着く。山の上には神殿が建ち、その南側にある広間の門はいつも開いていた。煉獄で浄化を終えて真っ白になった魂たちが広間の中へ入っていった。しかし、神殿へ入るには、生存している友人たちのミサ（Masses）が必要であった。Thurkel は、大天使 Michael の執り成しによって神殿の中に入ると、魂たちが階段を上っているのを知った。彼らは上るにつれて白さを増した。神殿の中にはたくさんの大邸宅があり、義人たちが住んでいた。そしてある時間になると、天の歌があたりに響き渡った。神殿の東側には歓喜の場所があり、花や薬草の香りがしていた。そこに泉が湧き、四つの川が流れ出ていた。泉を覆う大樹の下には Adam の姿もあった。そして Thurkel が少し進むと、黄金造りの門があり、それを抜けると黄金の聖堂が建っていた。その中には素晴らしく装飾された礼拝堂があって、三人の聖女たちが座っているのを Thurkel は見たのであった。

William は煉獄でのおぞましい光景を経験した後、梯子を登って高い塔の頂上にあるパラダイスへ辿り着く。その場所は、クリスタルのように輝き、たくさんの木々や香りのよい薬味に溢れ、鳥たちが楽しげに歌っていた。

以上のように、パラダイスの描写は、ほとんどの場合、光や香りをモチーフとしている。パラダイス内の建物や塔の壁あるいは門は、外側と内側を隔て光や香りの度合いを区切る役目がある。そして、入り口の門を飾る多種の宝石類は、パラダイスに一層の豪華さと輝きを加えている。多くの作品において、夢幻視者はまず暗黒世界に連れられて悲惨な光景を見たり、あるいは罪人たちの悲痛は叫び声を聞いて絶望感に襲われるが、パラダイスの至福に触れることで心身は癒され、夢幻視者の心理にパラダイスへの憧憬が鮮烈に刻み込まれるのである。

(5) 異界から現実世界への帰還

夢幻視者たちは、生命が溢れるパラダイスの様子を体験して、いつまでも留まりたいと願うが、神に忠実な生活をすれば、死後に神の国に戻れると勇気づけられ、肉体への帰還を余儀なくされる。元の世界に戻ると、聖職者であった者は一層精進し、罪を犯した者は

改心して美徳を積む。そして、異界の出来事を人々に伝授しつつ、余生を敬虔に過ごして昇天する。しかし、昇天後のことは具体的に語られず物語は終る。

Dialogues の Peter は、異界から戻ると、身に起こった事を人々に語り、断食と勤行に精を出した。Stephen の場合は、幻視で恐ろしい光景を見たが、肉体に戻った後も、邪悪な生活を正そうとはしなかった。彼は幻視から何も学ばなかったのである。ある兵士は、異界から帰還して意識が戻ると、その場にいた人々に不思議な出来事を語った。*History of the Franks* の St. Salvius は、異界から戻ると三日後に同胞たちに彼が体験した事を語る。そして、後年、彼は司教に選任され、人々に神への祈りを促し、善行を積むよう説教しながら敬虔な人生を送った。Bede が記す Furseus は、肉体に戻った後も敬虔な人生を過ごし、人々に善を行うように説いた。そして、Drythelm は、仮死状態から生き返ると、彼の細君に向かって、以前とは異なる新たな生活をおくると語る。彼は財産の一部を貧しい人々に喜捨しただけでなく修道士になって悔い改めの余生をおくった。

Wetti's Vision の描写では、Wetti は目覚めると、修道院長を呼んで、異界で見聞きしたことを皆が学べるように書き留めることを望む。その翌日の夜、彼は同胞たちの詩篇の賛美歌を聴きながら、臨終の聖体拝領（Viaticum）を受けて息を引き取ったのであった。*Charles the Fat's Vision* では、Charles の魂は肉体に戻ると、異界の出来事に極度に疲労した。彼の死については記されていない。

St. Patrick's Purgatory における騎士 Owein はもとの世界に戻ると、聖人となって聖地巡礼の旅に出る。そして彼はアイルランドの大修道院で通訳者として働き、敬虔な神の僕として余生を過ごした。*The Vision of Tundale* の主人公 Tundale は肉体に戻ると、犯した罪を悔い改めて全財産を貧しい人々に与え、十字架を身につけて修道士となった。そして神の言葉を人々に伝えた。*The Revelation of the Monk of Eynsham* では、修道士が肉体に戻ると、不思議なことに、病気が完治し健康を取り戻した。*The Vision of Thurkel* の Thurkel は、肉体に戻って意識が戻ると教会に行く。ミサの後で、司祭に死んだような状態の間に啓示された事を話してくれと頼まれるが、Thurkel は語ろうとしなかった。しかし、翌日の夜、異界へ導いた St.Julian が再び現れて、彼に異界で見聞きしたことをすべて公にするように命じる。

結語

以上、夢幻視物語の展開・構成に沿って五つの特徴に分けて解説した。考察によって、数世紀に渡って創作された種々の物語が、ほぼ同一の観念を基軸として著され、更に、類似する異界要素が様々に潤色・劇化されることで独立した物語として成立していることが理解できる。各作品の最大の創作目的は、Garidiner の以下の指摘に集約できよう。

> The soul goes on his "journey" for a specific purpose, and it is his enlightenment, so that either he himself will repent and reform or he will encourage others whom he knows or is about to meet on his return to repent and reform. [45)]

換言すれば、夢幻視者の異界体験は、当事者みならず、人間の普遍的生き方の新たな指針となる「啓示」なのである。

註

1) Howard Rollin Patch, *The Other World According to Descriptions in Medieval Literature* (1950; rpt. New York; Taylor Publishing Company, 1970).

2) Zaleski は、夢幻視物語の物語の展開をまとめている。Cf. Carol Zaleski, *Otherworld Journeys: Accounts of Near-Death Experience in Medieval and Modern Times*, (New York & Oxford: Oxford Univ. Press), 1987, p.33.

3) Cf. Morgan, Alison Morgan, *Dante and the Medieval Other World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990), pp.2-3.

4) この物語は http://www.fordham.edu/halsall/basis/gregory-hist.html#book4 を参照した。

5) Morgan, *Dante and the Medieval Other World*, p.3.

6) Eileen Gardiner, ed., *Visions of Heaven & Hell Before Dante* (New York: Italica Press, 1989)を主に使用する。この翻訳の諸作品は"the most important, best known, and most influential medieval visions of heaven and hell"なもので、本研究にとって必須の作品群を収録している。Cf. Gardiner, *ibid*, p.ix. ただし、*St. Brendan's Voyage* は、航海物語であるので、本研究から除いた。

7) Mearns は、異界への移動について Dana(1910)のふたつの形態を挙げている: "In the fisrt the hero is approached while asleep by the inhabitants of the Otherworld. In the second the hero is laid low, frequently violently...and the spirit is transported form the body." Cf. *The Vision of Tundale* ed. Rodney Mearns (Heidelberg: Carl Winter・Universitätsverlag, 1985), p.17. なお、12 世紀の作品 The Vision of Alberic では、鳥が現れて Alberic の魂を口から連れ出す。Cf. H.R.Patch, *The Other World*, p.110, Zaleski, *Otherworld Journeys*, p.56. 前者は"A bird like a dove"と記し、後者は、"doves"と記しているが、Thomas Wright の解説では、"white bird"が Alaberic の所にやってくる。この"white"は天界を表象する色彩であり、この鳥が天的な存在であることが理解できる。Cf. Thomas Wright, *St.Patrick's Purgatory: An Essay on the Legends of Purgatory, Hell and Paradise Current druing the Middle Ages* (London: John Russell Smith, 1844), p.118.

8) Gardiner, *Visions of Heaven & Hell Before Dante*, p.129.

9) *Ibid.*, p.136.

10) *Ibid.*, p.136.

11) *Ibid.*, p.250.

12) Zaleski は、異界の導き手の服装について以下のように述べている："Throughout medieval vision literature, the guide is consistently portrayed as shining, splendid, dressed in dazzling white robes." Cf. Zaleski, *Otherworld Journeys*, p.53.このように"white"は異界の色彩を表す。

13) Gardiner, *Visions of Heaven & Hell Before Dante*, p.xvi.

14) Zaleski は、中世の夢幻視物語のいつくかは、聖人（saint）が案内役を務めると述べている。Cf. Zaleski, *Otherworld Journeys*, p.54.

15) Cf. *Saint Patrick's Purgatory: A Twelfth Century Tale of a Journey to the Other World*, trans. by Jean-Michel Picard, with an introduction by Yolande de Pontfarcy (Dublin: Four Courts Press, 1985), p.72.
16) Gardiner, *Visions of Heaven & Hell Before Dante*, p.48.
17) *Ibid.*, p.48.
18) このように善人と悪人の魂を測る梯子(test-bridge)の起源は、ゾロアスター教の思想にみられる"Chinvat bridge"まで遡る。Cf. Zaleski, *Otherworld Journeys*, p.66, Patch, *The Other World*, p.8-9. 西欧では、この"test-bridge"の思想は Gregory the Great の時代から 14 世紀まで継承され、この橋の形態ー"slippery, spiked, narrow, braod or changing in width to suit the occation"ーは、橋の機能によって異なっている。Cf. Zaleski, *Otherworld Journeys*, pp.67ff.
19) Gardiner, *Visions of Heaven & Hell Before Dante*, p.61.
20) *Ibid.*, p.59.
21) *Ibid.*, p.61.
22) *Ibid.*, p.59.
23) *Ibid.*, p.59.
24) *Ibid.*, p.129.
25) *Ibid.*, p.141.
26) *Ibid.*, p.221.
27) *Ibid.*, p.223.
28) *Ibid.*, p.223.
29) *Ibid.*, p.223.
30) *Ibid.*, p.224.
31) *Ibid.*, p.222.
32) *Ibid.*, p.231.
33) Patch, *The Other World*, p.129.
34) Zalesky は、中世の幻視は天界よりも懲罰の領域に関心があるが、下降するよりも上昇する事についてより多くを語っていると述べ、その理由を以下のように説明している：One reason for the predominance of ascent in narratives of the apparent death variety is that the initial separation of soul and body is itself an ascent; before the souls can set out for any otherworldly destination, it must rise up out of the body. From this point there are seaveral options: and aerial tour of the planet, a journey to one of the four derections, or a heavenly asent. Cf. Zalesky, *Otherworld Journeys*, p.58.
35) "As the visionary ascends through heaven he meets higher and higher levels of the blessed. It is a hierarchical society; but unlike earth where position is tied to birth, here one's place is determined by the spiritual achievements of the soul while it lived." Cf. Gardiner, *Visions of Heaven and Hell*, p.xix.
36) *Ibid.*, p.xviii.
37) *Ibid.*, p.60.
38) *Ibid.*, p.60.

39) *Ibid.*, p.132.
40) *Ibid.*, p.145.
41) *Ibid.*, p.182.
42) *Ibid.*, p.186.
43) *Ibid.*, p.213.
44) *Ibid.*, p.216.
45) *Ibid.*, p.xx.その他、p.xxii-xxiii も参照のこと。

[On Characteristics of the Story Structures in Some Medieval Dream Visions]
[MIBU Masahiro・福岡歯科大学教授・イギリス文学・比較思想]